

〔日本紀略^{六融}〕天延三年八月廿四日癸亥、上總國申、夜月及申方之間、滿月始出東方、

〔本朝世紀〕正曆五年六月十五日乙未、此夕滿盈之月、出山際之間、已半月也、如三日之月、及丑刻之間、漸滿、明日有天文之奏、多有凶事、

〔小右記〕寬弘二年二月十八日丙申、去十六日日欲入之間、其色如火、月出間、其色相同、乍驚問遣奉平宿禰云、雲陰掩所見也者、昨日月又如一昨、今日又同、仍重問奉平宿禰答云、連日連夜有此事、誠可爲變、明日可上奏者、

〔中右記〕保延二年三月十八日、今夜月甚赤、如何、可問天文博士也、

〔百練抄^{八高倉}〕嘉應元年三月十六日、月色大赤、

〔顯廣王記〕安元三年六月三日辛未、今夕月中切云々、天變最重歟、

〔三代實錄^{五十光孝}〕仁和三年三月十四日戊子、是夜始自戌刻、月有冠纓、左右爲珥、至于亥時爲白暈氣、及將消滅、猶有兩珥、

〔吾妻鏡^{四十三}〕建長五年十月十三日戊午、今夜戌刻、月在五色笠、將軍家覽之、被驚思召之處、非變異

之由、司天等申之、

〔狗狢集^{五秋}〕十七夜立待に

柄のなきをさすとはいかに月のかさ

〔萬寶鄙事記^{六占天氣}〕月の暈は雨、黒氣あるもあめ、まかれども青霞花曇などいふ事のあれば、たと

ひ月に暈有ても雨ふらざる事有、月のかさは必ず中天にある時なり、十五日の前後七八より

廿二三日の間に有て、月のはじめおはりにはなし、月のかさ一方かけたるは風なり、たちまちに

暈消え去るは晴なり、をよそ暈は其所によりてこれ有、世上一時にはなし、

〔續日本紀^{九元正}〕養老七年十一月戊子夜、月犯房星、

久家